父の最期の地で・・・

県央支部　石川　初代（子）
戦没者　石川　一臣
戦没地　硫黄島

父は硫黄島の玉砕で戦死しました。私が一歳七カ月の時ですから当然戦争の記憶は皆無です。父と母の結婚生活は半年もなかったと聞いています。母は義父母と共に農業をしながら生活を支え、私を育ててくれました。筆舌に尽くし難い苦難の道であったことと推察するとき、今でも胸にこみ上げるものがあります。愚痴も言わず、弱音も吐かず、その多くを語らなかった母、ただひたすら娘（私）の成長を楽しみに身を粉にして働いてきたのです。その母に感謝のひとことも告げないまま、二年前父の待つ黄泉へ見送ってしまったこと、今更ながら悔やまれます。

九年前、父の最期の地、硫黄島へ慰霊巡拝をする機会を得ました。硫黄島への交通の手段は自衛隊の航空便であり、しかも貨物輸送機です。

これに五十名の参加者が乗り込み、埼玉の自衛隊入間基地から出発しました。

輸送機の中にハンモックのようなものがたくさん吊ってあり、それが座席です。輸送機のものすごい爆音で、隣の座席の人とも会話は出来ない状態での二時間余でした。

©2011_財団法人神奈川県遺族会

基地に到着し、最初は飛行場に隣接する厚生館に遺品が展示されているところを見学しました。それから天山にある硫黄島戦没者の碑に行き追悼式を行なったのち、戦跡巡拝をしました。

硫黄島は飛行場以外の建物といえば、鹿島建設の工事用の宿舎を見かけただけで、人家はないので人影もない。周辺は低木が多かったが、米軍が占領後にねむの種子を大量にまいたのでジャングル化しているところも多いと聞かされた。

日本兵は数多くの壕を掘って戦いに備え、身を隠していたそうです。厚生省等の調査で参加者のそれぞれの肉親の所属部隊がいたその壕の場所が明らかにされており、これには感動しました。巡拝が参加者の肉親の戦没地点で行なえるよう、三コースに分かれて自衛隊のマイクロバスに分乗し、別行動で巡拝しました。肉親がなくなったと思われる壕等の付近や碑がある場所で、該当者のみバスから降りて供養させていただきました。私は自宅の湧き水と、父が植えたという松を折って持参し供え「お父さん来ましたよ」と涙ながらに声にしました。ずっと秘めていた思いが叶い、胸の支えが取れたような気がしました。

救護班がいたという医務課壕は入り口付近から中を少しだけ見ることができましたが、医療器具が散乱していて、一瞬、負傷者や病人がそこに居るような気配を感じました。

各々の思いを馳せながら五時間の行程で硫黄島基地を後にしました。

硫黄島は今も過酷な条件の中で関係者による遺骨の収集作業が続いていると聞いています。関係者の方々にお礼を申し上げたいと思います。戦後六十五年、戦争は遺族のなかではまだ完結していないのです。

©2011_財団法人神奈川県遺族会